

心の栄養剤No107 【プールを歩いて渡った少女】

読売新聞の「窓」という欄に掲載されたお話です。

広島市の女子高生のA子さんは、小児麻痺が原因で足が悪い女の子でした。

A子さんが通う高校では、毎年7月のプール解禁日に、クラス対抗100mリレー大会をしています。男女各2名ずつがそれぞれ25m泳ぐ競技です。

A子さんのクラスで、この大会に出場選手を決めていた時、女子1名がどうしても決まりませんでした。早く帰りたいクラスのボスは・・・

「A子は、この3年間、体育祭、水泳大会に一度も出ていない。最後の3年目
なんだから、お前が参加しろ」

と意地悪なことを言い出しました。

A子さんは誰かが味方してくれると思ったけれど、女生徒たちは何か言えば自分が泳がされると思い、みんな口をつぐんでしまいます。

男子生徒たちもボスのグループに睨まれたくないから、何も言いませんでした。

そして、結局、泳げないA子さんが選手になったのです。

彼女は家に帰り、お母さんに泣きながら訴えました。

すると、お母さんは・・・

「お前は来春就職して、その会社で何か出来ない仕事を言われたら
また泣いて私に相談するの？
そしてお母さんがそのたびに会社に行って、うちの子にこんな仕事を
させないで下さいって言いに行くの？」

そう言ってすごく怒り、A子さんを突き放しました。

A子さんは、部屋で泣きはらし、25mを歩いて渡ることを決心し、そのことをお母さんに告げに行きました。

すると、お母さんは仏間で・・・

「A子を強い子に育てて下さい」

と必死に仏壇に向かって祈っていました。

水泳大会の日。

水中を歩くA子さんを見て、周りから笑い声や冷やかしの声が響きました。

彼女がやっとプールの中ほどまで進んだそのとき・・・

ひとりの男の人が、背広を着たままでプールに飛び込み、Aさんの隣のコースと一緒に歩き始めたのです。

高校の校長先生でした。

「何分かかってもいい。先生と一緒に歩いてあげるから
ゴールまで歩きなさい！
恥ずかしいことじゃない、自分の足で歩きなさい！！」

そう言って励ましてくれたのです。

一瞬にして、冷やかしゃ笑い声は消え、みんなが声を出して彼女を応援し始めました。

長い時間をかけて、彼女が25mを歩き終わったとき・・・

友達も先生も、そしてあのボスグループも、みんな泣いていました。

読みながら目頭が熱くなりました!!

世間ではモンスターピアレントみたいな親の話や、無関心、事なかれ主義の先生の話が連日のように報道され、テレビなどで「どうすればいいのか?」という議論があつてますが・・・その議論に納得出来る明確な「答え」が出る事はなく・・・いつもモヤモヤした気分が終わるのですが・・・

この話の中に、その答えがすべて入っているような気がします!

親も教師も、**その子にその子の将来に対する「責任」「愛情」を持って、その時その時のベストの行動～発言をする事が大切という事。**

ただ常にそういう感情を持っていないと、とっさに出来る事ではないだろう!!

健康も～教育も～愛情も「今だけ良ければよい～今だけしのげればよい」
というものでは決してないという意識を持てるか～持てないかで大きく変わってきます。その事は、時として辛く苦しいかもしれないけど、一番大切な事だと思います!

PS

私の両親も教師だったのですが～どんな教師だったんだろうと思います。そして、そんな環境で育った私も心の中で「一度教師をやってみたかったなあ～」という思いが今でもあるんですが・・・

はたしてこの話の校長先生みたいにプールに飛び込める先生になれたかなあ～!?

